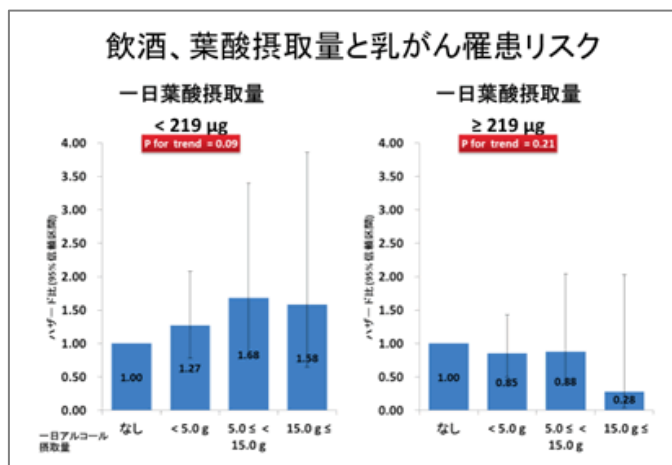


飲酒と乳がん罹患リスク：宮城県コホート

Alcohol consumption and breast cancer risk in Japanese women: The Miyagi Cohort Study
2011 年 Breast Cancer Research and Treatment 発表

飲酒と乳がん罹患リスクは欧米において多数の研究があり、確立したリスク因子の一つと考えられておりますが、日本人を対象とした研究では少数の前向き研究があるのみで、その根拠は不十分であるといえます。更に日本人女性のライフスタイルは欧米とは異なり、また変化しつつあることから、独自の研究が必要であると考えられます。そこで今回は日本人女性を対象として飲酒量が女性の乳がん罹患リスクに影響を与えるかどうかを前向き研究により検討しました。

飲酒歴、飲酒開始年齢、一回飲酒当たりのアルコール量、一日当たりのアルコール量と乳がん罹患リスクの関連は特に有意なものは認められませんでした。閉経前後、女性ホルモン剤使用の有無で層別化した解析でも同様でした。しかしながら、葉酸摂取が少ない群においては一日当たりのアルコール量が増えるにつれて乳がん罹患リスクが上昇する傾向を認めました(図)。



研究のデータについて

ベースライン調査：解析には「宮城県コホート」と呼ばれている、宮城県内の調査集団のデータが使われました。このデータは1990年6月から8月にかけて、宮城県内の14町村在住の40–64歳の男女5万1921人に対して生活習慣や健康状態などに関する自記式質問紙を配布し回答を得たものです。そのうち女性では26,642人のうち24,769人から有効回答(93.0%)を得ています。有効回答を頂いた24,769人の方を対象に、調査時から2003年12月31日まで約12.8年の追跡調査を実施しました。このうち、本研究では、調査開始以前にがん罹患したことのある女性705人、飲酒歴の情報が無い4,837人を解析の対象から外しました。その結果、19,227人が調査対象となりました。乳がん罹患は宮城県地域がん登録を利用して把握し、追跡期間中に241人が乳がんと診断されました。研究期間内に転居などで追跡できなくなった方は1,182人(6.1%)でした。

飲酒について

調査時記載していただいた飲酒歴(なし/現在飲酒/過去飲酒)、頻度(なし/時々/週1–2回/週3–4回/週5–7回)、飲酒開始年齢(なし/25歳未満/25歳以上35歳未満/35歳以上)、また、酒の種類(日本酒、焼酎、ビール、ウィスキー、ワイン、その他)と一回当たりの飲酒量から計算した、一回飲酒当たりのアルコール量(なし/11.5g未満/11.5g以上23g未満/23g以上)、一日当たりのアルコール量(なし/5g未満/5g以上15g未満/15g以上)を用いて検討しました。それぞれの群において、飲酒なしの群を基準とした場合の乳がん罹患リスクを求めました。また葉酸摂取量を一日摂取量の多い群と少ない群に分けて、層別化解析を行いました。

食事調査

食物摂取頻度調査票(food-frequency questionnaire: FFQ)を使用して、一日あたりの葉酸摂取量を算出しました。本調査には飲酒も含まれており、この調査票の妥当性は「食物摂取頻度調査票の妥当性と再現性について」研究にて高いことが示されております。

他のリスク要因の影響について

この研究では、乳がん発症に関連すると考えられる要因の影響を考慮して結果を算出しています。具体的には年齢、BMI、喫煙、飲酒、運動、職業、教育歴、初潮年齢、閉経年齢、出産年齢、出産数、授乳歴、乳がん家族歴、女性ホルモン剤の使用といった要因についてグループ間に偏りがないように統計学的な処理を行いました。

研究の特徴について

この研究は、一般住民を対象とした大規模な前向き研究であり、未把握が 6.1%と低く、さらに精度の高い地域がん登録を用いて乳がん罹患を把握していることから非常に信頼度が高いといえます。また、日本人を対象とした研究において葉酸摂取量を調整したものは非常に少なく、価値が高いといえます。

生物学的メカニズムについて

アルコールは、細胞の DNA 障害を修復する際に利用される葉酸に拮抗する作用を持つといわれています。つまり、多くの飲酒をすることで葉酸不足になり、障害を受けた細胞が十分修復できなくなり発がん性が増すと考えられています。したがって、葉酸摂取量の低い集団での飲酒は、より発がん効果が高くなると考えられます。
